レポート

アジアの村のごみ事情を現地で学ぶ
学生向けエコツアー2017
in インドネシア・ロンボク島

NPO 法人ゆいツール開発工房（ラボ）

目次

１．　ツアー概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

２．　ロンボクで体験した村ツーリズム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

３．　ランタン村での暮らし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

４．　ロンボク島のいくつかのごみ銀行について・・・・・・・・・・・・・・・・・10

５．　芸術村カウィス・クリサンと NTB マンディリごみ銀行・・・・・・・・・・15

６．　インドネシアのマングローブに対する考察～マングローブ観光地を訪れて～・・21

７．　私を見つめたインドネシア～2 度目の村ツーリズム～・・・・・・・・・・・24

８．　宗教文化の濃いロンボクの村で感じた、愛と幸せ・・・・・・・・・・・・・27

９．　ツアーに参加した感想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

１０．あとがき～2017 年度のツアーを振り返って～・・・・・・・・・・・・・・・31

１．　ツアー概要

【日程】2017年12月20日（水）～29日（金）

【参加者】

大西飛輝（Takaki Onishi）大阪府立西野田工科高等学校1年

新井美貴子（Mikiko Arai）都内の大学4年社会学部

尾崎優香（Yuka Ozaki）早稲田大学大学院

篠原優衣（Yui Shinohara）酪農学園大学3年生

清水真美子（MAMIKO SHIMIZU）早稲田大学政治経済学部国際政治経済学科四年

今井陽一郎（Yoichiro Imai）社会人

金子真実（Mami Kaneko）社会人

長澤美佳（Mika Nagasawa）社会人

【スケジュール】

日にち	内容
12月20日（水）	羽田空港集合、ジャカルタへ。乗り換えてロンボク島へ
12月21日（木）	ごみ埋め立て地見学、「ごみ銀行ってなんだろう？」
12月22日（金）	ランタン村へ。若者たちと村を散策。日本の文化紹介。村に宿泊
12月23日（土）	ココナッツオイル、コーヒーづくり体験、田仕事体験。ワークショップ参加（自己紹介、村のいいところ、気になるところなど）。ロンボクの伝統紹介。村に宿泊
12月24日（日）	ごみに関する聞き取り、ワークショップ参加（村ツーリズムを発展させるためにできること）。お別れの会。村に宿泊
12月25日（月）	ランタン村とお別れ、ギリ・メノ島へ。シュノーケリング（バンガローに宿泊）
12月26日（火）	海の生きものプログラム体験
12月27日（水）	芸術村カウィス・クリサンとNTBマンディリごみ銀行の見学、マングローブ林の見学
12月28日（木）	織物の里でお土産探し、ロンボク島からジャカルタ、羽田空港へ

【助成金】

・地球環境日本基金

・国際交流基金（アジア・市民交流助成プログラム）

２．ロンボクで体験した村ツーリズム

清水真美子

私は 2017 年、大学四年の冬にゆいツールの「アジアの村のごみ事情を現地で学ぶ、ロンボク島の学生向けエコツアー」に参加しました。私は、JENESYS 日 ASEAN 学生会議や内閣府の東南アジア青年の船事業に参加した経験があり、その中で東南アジアのごみ問題には強い問題意識を持っていました。特に、JENESYS 日 ASEAN 学生会議において環境部会に所属し、インドネシアで深刻化するプラスチックごみ問題について彼らと議論したことは、今回のエコツアーに参加する大きなきっかけとなりました。

また、私は 2016 年夏に中国の村に三週間ホームステイし、村の見聞を深め、伝統を経験し、世界中から集まった若者達とマテリアル（村マップやホームステイマニュアル、村の見どころをまとめた冊子等）を英語で作ったりすることで、現地の村ツーリズムの発展を促進した経験がありました。その際に、外国人目線で村の魅力を引き出すことは、村ツーリズムに欠かせないと思うに至りました。というのも、村の人々にとっての当たり前が、外国人にとっては凄く貴重であったり面白かったりということがあるからです。そのため、今回のエコツアーでも自分の経験が少しでも活かせたらと思っていました。

今回のランタン村は、村ツーリズムとエコツーリズムを実践しようとしており、とても興味深いと思い、ランタン村を通してインドネシアの新しい一面に触れることを非常に楽しみにしていました。

私達はランタン村にとって初めてのオフィシャルな村ツーリズムの観光客でした。村に到着し、早速私達は盛大なおもてなしを受けました。非常に感動しました。ランタン村の熱気とエネルギーを感じた瞬間でもありました。

それから 3 泊、日本人 2 人ずつが一家庭にホームステイしました。3 日間で、ココナッツ割りとオイルづくり体験や村散策、互いの文化の紹介、村の良いところに関するワークショップ、ごみ問題に関するディスカッションと学習ゲーム、村でのツーリズムに関するワークショップ、現地の結婚式訪問等を行いました。

上記に述べたように、現地の若者達とランタン村の村歩きをしたり、様々な活動を行う中で、ランタン村がどのような村なのか感じ知ることができました。また、そこから、ランタン村における村ツーリズムの発展にとって何が必要なのか、参加者一人ひとりが当事者意識を持って考えることができたと思います。

加えて、実際に村ツーリズムやエコツーリズムに関して、村の若者達と日本人参加者に分かれ、「ツーリストの視点からランタン村の良いところはどんなところか」「ランタン村で村ツーリズムを発展させるために、もっとこうしたほうが良いと思うこと」を話し合ったこともランタン村での村ツーリズムを考える上で良い機会になりました。日本人参加者からは、集客数を増やすことと村ツーリズムのおもてなしの大きく 2 つの観点から多くの意見が挙げられました。例えば、集客数向上に向けて、SNS を用いた広報・特徴を他の村と差別化・ターゲットの明確化・モニター誘致・外国人のニーズの把握等が有効なのではとの意見が上がりました。また、おもてなしに関しては、生活上のルールをあらかじめ伝えるようにすること・ごみ箱を用意してあげること・体験ツアー作り・食事や言語のニーズを村訪問前に把握できる仕組みづくり等が挙げられました。

村での体験を選べるオプショナルツアーを作ってはどうか、という意見は私達ならではのアイデアだったと思います。例えば、村には料理が得意な親子がいました。そこで私達は現地の料理やお菓子作り体験をできたらよいのではないかと考えました。また実際私達も経験させてもらったのですが、ココナッツ割りとココナッツオイルづくり等はランタン村では当

たり前のことでも日本では経験できるようなことではなく、非常に有意義なもので、観光客の心を掴むことができると考えました。他にも、村の自然を感じる散策プランや村のおばさんにマッサージしてもらうプラン等も案として出ました。ランタン村に来て改めて、現地の人にとっては何気ないことや当たり前のことが外国人にとっては新鮮で、十二分に観光のシーズになると感じました。

個人的には中国の村で自分が経験したような、観光モニターのようなことができたら更に有益なのではないかと思います。例えば、外国人を２～３人村に呼び、無料もしくは少額の参加費で村にホームステイしてもらいます。その際に、SNS を用いた広報や村の魅力を伝える冊子やマップを英語で作ってもらいます。こうすると、外国人目線も得ることができ、英語のマテリアルもでき、一石二鳥です。英語で作られた観光ガイドやマップ等は英語が話せる人材がそこまで多くはない村にとって今後の村ツーリズムを発展させていく上で有益なツールとなるのではないでしょうか。

ランタン村には村ツーリズムを発展させようと真剣に考え、それを牽引していく優秀な若者が多いと思いました。よそ者の存在は確かに有益ですが、村ツーリズムの発展は、その土地の人々が如何に本気になり行動するかにかかっていると思います。その点、ランタン村は十二分に村ツーリズムそしてエコツーリズムを発展させていくポテンシャルに溢れていると思います。

是非一人でも多くの日本人が、そして世界中の人々がランタン村を訪問してくれたらと思います。観光客が増えることで、新しい問題が顕在化し、その都度ランタン村における村ツーリズムの在り方は再定義されることでしょう。しかし、ランタン村には豊かな自然と文化、人財があります。私もまたいつか必ずランタン村を訪れたいし、彼らのために少しでも今後役に立てたらと思います。

３．ランタン村での暮らし

尾崎優香

村での暮らしは、自然や人と結びついていて、そこにある「つながり」の全てに支えられていた生活でした。

（１）村での１日

日の出前	村の人たち起床。お祈り。
7:00	起床。朝食作り、川での洗濯、バトミントンなどホストファミリーとの交流。
8:00	朝食。お米が多く、おかずが少ないのが一般的。朝食後のティータイム。ホストファミリーとインドネシア語の本を活用しながら交流。
9:00	午前の活動。ココナツオイル作り、コーヒー作り、若者とのワークショップなど。
12:00	全員で昼食。私たちのために辛くない料理を準備してくれる。現地の方はお祈り。昼食後のティータイム。
13:00	午後の活動。Jalan jalan（村の散歩）、結婚式訪問、若者とワークショップなど。
17:00	Mandi（水浴び）。一旦帰宅し、各家庭で水浴びやお祈り。
18:30	全員で夕食。夕食後のティータイム。
19:30	夜の活動。お互いの文化紹介活動や、お別れ会。
23:00	活動の状況や雨の状況に応じて解散。バイクで移動する必要があったため、雨で帰れず0時頃まで交流を続けていた日もある。

（２）文化・宗教とのつながり

村での暮らしは、文化、宗教に深く関わることをたくさん経験することができました。インドネシアやロンボク島の歴史、教育、他の島とは異なるロンボク島特有のササック文化やササック語、お祈りが中心に一日の予定が組まれることや左手を使わないことなどを学びました。今回詳細は割愛しますが、村でのホームステイを通じて、相手の文化や宗教について単なる知識として知るだけでなく、体験を通して学ぶことでより深く考える機会になりました。

ジルバブをつけてホストファミリーと

（３）コミュニティーのつながり

ランタン村の方々は、とても温かい人たちでした。温かさや笑顔の連鎖が起き、その場にいるみんなが幸せになれる。そんな場所でした。その背景には、コミュニティーのつながりが色濃く残っていることがあるのだと感じました。一歩外に出れば、すれ違う人々は皆知り合いで、笑顔で挨拶を交わします。小さな子どもたちは兄弟や親だけでなく、友達、地域の人々がみんなで面倒を見ています。

ランタン村では、私たちの同年代の若者が、自分の村を少しでもよくしていこうとボランティア団体を立ち上げて教育の機会を提供していたり、エコツーリズムで村の魅力を伝え、地域の発展のために動いていたり…。若者たちの原動力の背景には、コミュニティーのつながりがあるのではないかと感じました。彼らは、とても活気に満ちていて、今後の生き方を考える私に、大きな刺激を与えてくれました。

ランタン村の若者たちと

（４）自然とのつながり

ランタン村はたくさんの自然に囲まれ、人々は自然と共生していました。私たちがJalan-jalan（散歩）をしていると、村の人はカカオやフルーツを取って味見をさせてくれました。Kelapa（ココナツ）が好きと言ったら、取ってきてくれました。雨が降ればみんなでお話やカードゲーム、音楽をしながら、雨が止むのを待ちました。

お家では、Bebek（アヒル）やayam（ニワトリ）、kanbin（ヤギ）を飼っています。朝ごはんにはTelur Bebek（アヒルの卵）の目玉焼きを出してくれました。とても貴重なカンビン（ヤギ）をしめるところも見ることができました。愛情をかけて育てたカンビン。お祈りをしてお肉にしていきます。自然とのつながりを感じ、その中にある命のありがたみを深く感じることができました。

自然に囲まれるランタン村

取ってきてくれた kelapa（ココナツ）で休憩

（５）ゴミ問題とエコツーリズム

ランタン村だけでなく、ロンボク島ではゴミが大きな社会問題になっています。伝統の残るランタン村では、例えばココナツの殻、バナナの皮など土に還る物が多く、ゴミを分別する習慣がありません。しかし、近年ではプラスチックやビニールゴミなどが増えてきています。それらのゴミも、道や庭などに捨ててあり、散歩をしているとたくさんのゴミが目に留まりました。

ランタン村では近年、エコツーリズムに取り組んでいます。エコツーリズムの発展は、貧困層も多い村にとって、現金収入の財源になる、などの利点もあります。しかし、一方で、分別のない観光客が増えれば、村のゴミ問題は解決するどころか、悪化の道をたどってしまうかもしれません。ランタン村の素敵な自然や文化が、エコツーリズムを通じて損なわれていくのではなく、今後も残ることで、多くの人たちへ村の素晴らしさを伝えていけるものになればと願います。

（６）ジレンマ

ランタン村では、現地の若者とともにゴミ問題やエコツーリズムに関するワークショップなどを行いました。もちろんランタン村について考えることは意味のあることでした。

しかし、私の中にはずっと違和感もありました。日本へ帰ってきてからは、ジレンマばかり抱えています。外から口出しするのは簡単です。しかし、実際に私たちの生活を振り返れば、ランタン村よりはるかに多くのゴミを出し、自分の国の伝統や文化について知らないのです。ランタン村の若者は、課題に気付き行動を起こそうとしています。日本人は見て見ぬ振りをして、行動さえしていないのです。

・水が流れるトイレ、きちんと整備された道、簡単につながるネット環境…
・高いビルや人工物に囲まれた街並み…
・自然や人から切り離されてしまっている生活…
・あんなにゴミ問題について話し合ったのに、必要のないゴミを、ロンボクでの生活以上に出してしまう生活…

確かに日本での生活は、とても便利かもしれません。しかし、その中で違和感を感じ、息苦しさを感じてしまうのも事実でした。目を背けたくなるようなたくさんのジレンマを目の当たりにし、改めて今後何ができるのか、何をしてかなければいけないのか、考えていこうと思いました。

村の若者と一緒に参加したゴミに関するワークショップ

（７）最後に

今回ランタン村で私は、今後も一緒にいる友達だけでなく、お互いに刺激を与え合い、より良い社会へ向け共に行動していく仲間と、遠くにいてもお互いに気を寄せ合う家族ができました。また必ずロンボクへ戻りたいと思います。（Saya mau pergi ke Lombok.）

様々な方のご支援、ご協力のもと、とても貴重な経験をさせていただきました。今回、このような貴重な機会をいただけたことに、心から感謝致します。ありがとうございました。（Terima kasih banyak.）

お見送りをしてくれるホストファミリー

４．ロンボク島のいくつかのごみ銀行について

長澤美佳

私はこのツアーに参加するのは今回で二回目です。前回のロンボク島エコツアーの参加をきっかけに、ごみ問題についてだけではなく、ロンボク島の人や人々の暮らし方、文化、宗教などにも関心を持つようになりました。

ロンボク島で経験した様々なことは、私自身の視野を広げ刺激となっています。

そして今回学んだごみ問題はロンボク島だけの問題ではなく、世界の問題でもあると考えます。現在、ごみ銀行のようなごみを活かす活動は色々な国で着目されています。ごみを資源として活かす努力をしながら、人々の生活・自然環境をより良いものにしていくことが重要です。私自身もこのロンボク島エコツアーに参加したことで、ごみに対する意識も変わってきました。多くの人にごみ問題やごみが利活用できることを知ってもらうことで、ごみ問題への関心や意識が高まっていくことを願っています。

●埋め立て地訪問

【12 月 21 日 西ロンボク県にあるごみの埋め立て地】

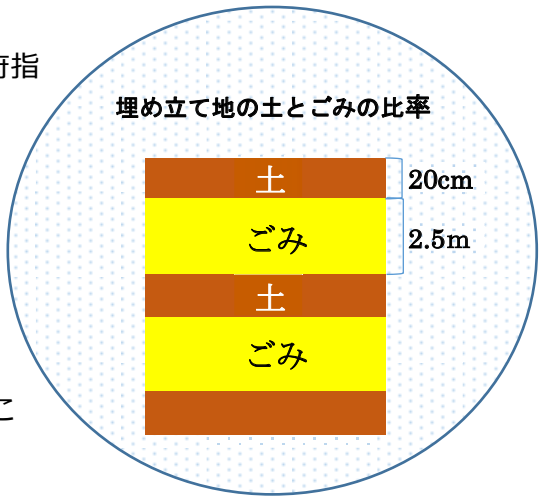
クブン・コンゴというところにあるごみの埋め立て地を見学しました。ここではマタラム市と西ロンボク県のごみが集められています。ごみ収集車は黄色い色のトラックです。その他にも、トサというバイクの後ろにごみを積むものもあります。現在 15 名が雇われ、その他にプムルン (ごみを拾う人)が金目のごみを探しています。プラスチックごみは、大きな袋一杯で約 300 円くらいのお金になるそうです。

埋め立て地では、運ばれたばかりのごみが山のように積まれ、強い異臭も放っている状態でした。この匂いをかぎながらの仕事はとても過酷であり、仕事をする人の健康面も心配でした。

ごみを積んだトラックは車ごと計ることのできる、計測器で毎回ごみの量を計ります。ナンバーの付けられたトラックは車種ごとに一日 4 回ごみを運び、一日およそ 470 トンのごみがこの埋め立て地に運ばれてくるそうです。実はごみの量に対してごみ収集トラックの数は足りていません。

この埋め立て地では、運んできたごみを“土・ごみ・土”とサンドイッチのようにして約 25 年も積み上げ管理してきました。この場所にごみが置ききれなくなった時にどうするのか大きな課題でもあります。そして、この埋め立て地に回収してもらえるごみは、政府が管理し

ているもののみです。マタラム市では、市内にある政府指定のごみ捨て場に一般家庭のごみも捨てられますが、西ロンボク県では市場などの限られたところにしかごみ回収コンテナが設置されていないため、家庭で出たごみは自分たちで燃やすか、道ばたにポイ捨てされてしまうのが現状です。さらに、行政側にはお金がないため、民間に仕事の依頼をすることもできません。こうした状況もあり、2018 年度からは、県から州へと管理体制が変わることになっています。



【ごみ収集トラック】

【車ごとできる計測器】

【ごみ計測量一覧】

【埋め立て地の様子】

【リサイクルごみを集める】

悪循環のごみ問題

時代の流れとと共にオーガニックのごみだけではなく、プラスチックなどのごみが増えている

→

家庭のごみが県や州によって管理（ゴミ捨てのシステム化）されておらず、住民のごみへの意識も低いため、ポイ捨てなどにより町がごみで汚れてしまったり、家庭ごみを燃やす等、大気汚染につながっている。

→

衛生面、自然環境の悪化
↓
今後、人体への影響なども考えられる
さらなる深刻な問題へ

ごみ銀行とは？

地域住民などが集めたごみをごみ銀行で管理し、資源として活用することで(商品開発、一般廃棄物処理業者に買い取ってもらうなど)現金が得られるシステムです。ごみ銀行の形は様々で、ごみの収集だけではなく、コンポスト(有機肥料:有機物を微生物によって完全に分解した肥料のこと)を作ったり、クラフトを作ったりと工夫を凝らし活動しているところもあります。

ごみ銀行の流れ

地域住民が日常で出るごみを集め、ごみ銀行に持ち込みます。持ち込まれたごみはそれぞれのごみ銀行で用意された指定の「通帳」によって管理され、通帳にはごみの種類や量などが記載され、その人がどれくらいのごみ資源を集め、持ち込んでいるのか詳細が一目で分かるようになっています。ごみ資源を商品化したり一般廃棄物処理業者に買い取ってもらうためには、ある程度のごみの量を集めなければなりません。そのため一定の量になるまで、ごみ銀行でごみを管理します。汚れなどをきれいに落とし、ごみを種類ごとに分別もします。こうした工程を経て、商品化や業者への買い取りへとつながるのです。(商品化においては商品の作成・販売[新商品の開発]、安定した販売場所の確保、販売場所の開拓なども考えなければなりません)

このようにごみ銀行の努力により、一度にたくさんのごみを収集できない人にとっても、その人のペースでごみ資源を集めることができ、誰もが参加しやすいシステムになっています。

【ごみ銀行について紹介したパンフレット（ゆいツール作成）】

【ごみ銀行の通帳】

【通帳の詳細】⇒

●ごみ銀行訪問

【12 月 21 日 村を巻き込んだ活動　シウン・グミランごみ銀行】

今回で二回目の訪問となる西ロンボク県レレデ村のシウン・グミランごみ銀行では、代表者のハミドさんを中心に精力的に活動を行なっていました。ハミドさん自身はこのごみ銀行の活動がビジネスになっているわけでなく、村の環境を良くしたいと村の人を巻き込んで、半分ボランティアで活動を行なっています。飲み物のプラスチック袋を活用したポーチなどの作成・販売の他、今回の見学では新たな取り組みとして近隣の生ごみを集め、コンポストも作っていました。

ごみ銀行の存在により、村人たちのごみへの意識が高まってきたと言います。一方で、住民から集められたごみ資源を管理する場所の確保や、コンポストの活動をさらに広げるための資金集めなど、まだまだ課題もあります。しかし、ハミドさんの地道な努力は地域行政にも認められ、一般家庭ごみは回収しない西ロンボク県でハミドさんの集めたごみを取りに来てくれるようになったとのことでした。

さらに嬉しいことは、高倉式コンポストという日本人が考えたコンポストがインドネシアで広がり始め、ホテル等でも作られるようになっているそうです。

【クラフト作り】

【地域のごみ】

【コンポスト作り】

近隣から集められた生ごみ

【シウン・グミランごみ銀行にて】

【12 月 21 日 様々な活動に挑戦するブルスリ・クカイごみ銀行】

ブルスリ・クカイごみ銀行の代表者パイズルさんは NTB マンディリごみ銀行代表のアイシャさんに指導を受け、現在のごみ銀行を始めました。ここでは、飲み物のプラスチック袋で作成したポーチなどのクラフトづくりや液体コンポスト、葉っぱコンポスト、高倉式コンポストと言った三種類のコンポスト作りを行っています。さらに、エコブリック(ペットボトルの中にプラスチックごみを詰めたもの)を利用し、ごみ銀行の正面玄関ゲートも作っていました。

パイズルさんもレレデ村のハミドさん同様、「自分の住んでいる村が綺麗になってほしい」という思いで活動を行なっています。パイズルさんのお話しや色々なことに挑戦しようとする姿からごみ銀行への熱い思いを感じました。

【プラスチック袋で
できたクラフト】

【説明をするパイズルさん】

【エコブリックで
作ったゲート】

●感想

今回はロンボク島エコツアーへの参加が二回目ということで、ごみ銀行の活動を再確認しながら見学することができました。昨年も見学したシウン・グミランごみ銀行と NTB マンディリごみ銀行においても、さらに新しい活動がされておりとても嬉しい気持ちになりました。

正直、この一年でごみ銀行に大きな変化があるとは思ってもいませんでした。それは、運営資金面やごみを保管する場所の問題、協力者の問題など、これらの問題の解決は容易なことではないと思っていたからです。しかし、コンポスト作りや町のアート化など、活動の幅が広がっていたことに驚きました。

このごみ銀行の活動が継続できている裏には様々な人たちの計り知れない努力があると思います。今は地域単位の小さな活動かもしれませんが少しずつ住民のごみ問題への意識改革につながっていると感じます。もしかしたら、地域という小さい活動だからこそ深く浸透しているのかもしれません。

日本はごみ処理や衛生管理についてのシステムが整っており、国のみならず住民のごみへの意識は比較的高いと思われがちです。しかし、食品廃棄量は世界でトップクラスです。ごみをなるべく出さないような意識を持つこと、出てしまったごみをどのように利活用できるのかを考えること、どちらも向き合わなければならない大きな問題です。

今回、ごみ銀行でプラスチック袋で作ったクラフト作りやコンポスト作りなどを見学し、ロンボク島のこうした活動はとても素晴らしい活動だと思いました。国によってごみ問題や課題への取り組みも様々です。そのため、ロンボク島と同じ活動をすることが日本にとってのごみ問題、環境問題の解決につながるかと言うと必ずしもそうではないだろうし、日本のごみ処理システムをロンボク島にそのまま持ち込めるかと言えばそうでもないと思うのです。大切なことは、今回のロンボク島エコツアーのようにお互いのごみ問題への活動や人々の意識を知り合い、学び合い、刺激し合うことだと思います。そして、それぞれの国のごみ問題の事例からごみ問題について知るきっかけを作ったり、ごみ問題を考えるヒントを得たりすることが必要だと思うのです。つまりその国その国にあった課題解決方法や取り組み方をこうした事例を通して比べ合い、考えなければならないということです。

今回のロンボク島エコツアーもとても新鮮な気持ちで参加することができました。一年前に出会った人たちと再会できた喜びや新しい出会い、そして充実した学びがありました。貴重な経験ができたことを心から感謝し、ロンボク島での経験したことをたくさんの方に伝えられたらと思います。

ありがとうございました。

5. 芸術村カウィス・クリサンと NTB マンディリごみ銀行

新井美貴子

自分たちの町がごみでいっぱいである。それがすごく気になるし、変えたい…。

そう思ったとき、あなたはどのような行動にでるでしょうか。インドネシアのロンボク島に、自分なりのアイディアをもって周りの人を巻き込み、集落の景観を大きく変えた女性がいます。その人の名前は、アイシャさん。彼女は、※1 ごみ銀行を自分の町で始めました。

前列左から二番目がアイシャさん

アイシャさんは、JICA のプロジェクトで福岡県北九州市を訪問し、*2 高倉式コンポストについて学んだ経験もあります。そして、自分のごみ銀行にもそれを作り、他の村にも指導して普及させています。

※１ごみ銀行とは…住民がリサイクル可能なごみを集めて持っていくことで、通帳にその資源のぶんだけのお金が記載されて、後日引き出せる仕組みのこと。持ち寄られたごみは、ポーチやかばんなど付加価値のある商品に作り替えられて販売されます。

※２高倉式コンポストとは…現地で入手できる発酵菌を使って、生ごみを短期間で堆肥化させる技術のこと。北九州市の民間企業、J-POWER グループ株式会社ジェイペック若松環境研究所に勤める高倉弘二氏が開発しました。

(JICA HP 参照 https://www.jica.go.jp/kyushu/office/compost.html)

シウン・グミランごみ銀行のコンポスト

高倉式コンポストは今回見学したすべてのごみ銀行にありました。私が以前ジャカルタを訪れたとき、滞在先のホストファミリーが、「日本から伝わったやりかたなんだ！」と教えてくれたことを思い出します。インドネシア中にシステムが広がっているようです。

アイシャさんは、このようなごみ問題解決のための活動をしているにもかかわらず、ごみ銀行周辺の地域がごみだらけであることに心を痛めていたそうです。そこで「芸術村（Kawis Krisant）」のプロジェクトを考え、スタートさせたそうです。この具体的な内容は、村のごみを拾ってきれいにしたうえで、地域全体にイラストを描いて、観光地化することです。当初、23 人の若者の協力を得て村内清掃・ペインティングなどの準備をすすめ、2017 年 6 月にカウィス・クリサン芸術村としてはじめてのお客さんを迎え入れたそうです。

カウィス・クリサンを少し歩くと、たくさんの村人の笑顔に触れることができます。子どもが敷地内を走り回り、高い木の棒にのぼる男の子もいて、なんだか牧歌的な風景です。ここまでは、他の村と似ているかもしれませんが、違いは建物にあります。壁や地面などに青、黄、ピンクなどのカラフルな色づかいの絵が描かれていて、歩くだけで楽しくなります。村のどこかしこも「インスタ映え」しそうな感じ…。

「川はごみ箱じゃない」などの標語もポップに。

そんな村は、少し前までゴミばかりの村でした。ガイドの方が見せてくれた、かつての写真と比較すれば、一目瞭然です。

お菓子のプラスチックごみなどが散乱しているかつての村の近くの川の様子

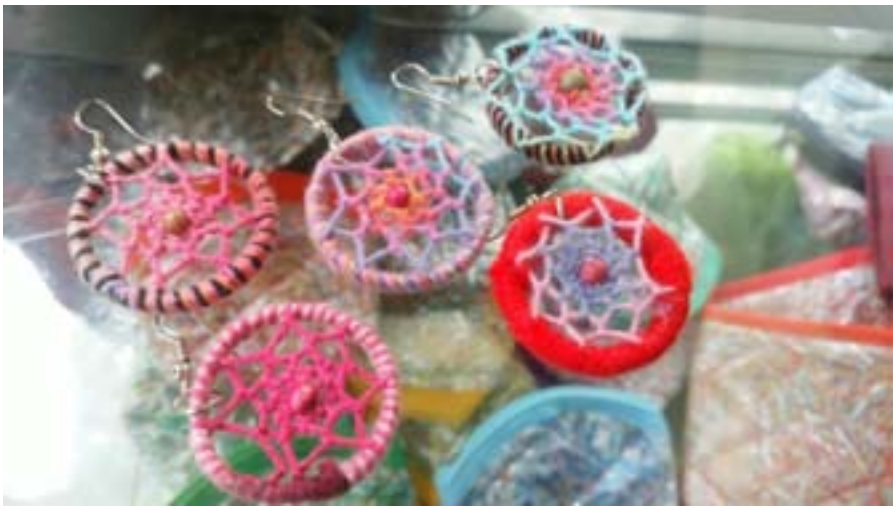
現在の川との比較。こんなにきれいになりました

「自分の村にお客さんを呼びたい」というモチベーションのもとで、お金がもらえるわけではなかったのにもかかわらず、若者たちは活動を自発的に行ったそうです。今は、私たちのようなお客さんの訪問が、「はるばる見に来てくれる人がいる、それならもっと頑張るか！」というように、モチベーションにつながるのだといいます。「見学しているだけ」ともいえる私たちの行動自体も、まちづくりへの価値をもたらしていたのです。実際、私たちだけでなく世界各国から沢山のお客さんが訪問してきていて、村人はとても嬉しいそうです。

また、私たちの訪問は、経済的な効果もあります。カウィス・クリサンの入場料は 35,000 ルピア（300 円程度）で、そのお金のうち、10,000 ルピアはごみ銀行、10,000 ルピアは村の運営、15,000 ルピアは地域管理費（イラストのペンキ代など）に使われるからです。このように一過性ではなく継続的に地域経済がまわるシステムづくりを行っているのです。

かつてごみばかりだった場所が公園に

最後にアイシャさんのごみ銀行で、ドリームキャッチャーのようなピアスを買いました。これは、ペットボトルの蓋を基盤にして、そのうえに糸を編んで作ってあり、その色使いが気に入りました。大きく目につきやすいピアスなので、帰国後に友人にピアスについて「どこで買ったの」と聞かれることが多く、そのたびにごみ銀行とロンボク島ツアーについての話をしています。商品を買うことでその地域の経済をまわす些細なお手伝いができるだけではなく、使うことでその広報活動にもつながると実感しました。これからも、お気に入りのピアスのひとつとしてどんどん使って、ごみ銀行の話のきっかけを作り続けていきたいです。



私たちがアイシャさんのごみ銀行を訪問したのは、カウィス・クリサンができてまだ半年

しかたっていない 12 月のことでした。ごみ銀行からはじまって、高倉式コンポスト、芸術村と、地域住民を巻き込みながら、どんどん広がりを見せていくプロジェクトが、これから将来にわたってどんな新しい企画を含んで発展していくのかが楽しみです。

まとめ

「ごみ銀行訪問」はツアーで私が最も楽しみにしていたものでした。なぜなら、私は、大学時代を通じて、「フードバンク」でボランティア活動をしており、同じ「バンク（銀行）」のつく社会活動として興味があったからです。カウィス・クリサンを作ったとき、住民たちは「お金をもらえる」からではなく、「楽しいから」その活動を続けたと聞きました。私が、フードバンク活動に参加していたのも、「社会のため」というよりむしろ、色々な人と話をしながら協働することに楽しみを見出していたからでした。インドネシアと日本で場所は違えど私たちの気持ちは同じなのだと、嬉しくなりました。そして楽しみながらやることこそ、社会活動につながるのだと再実感しました。

　また、今回のツアー全体を通じてインドネシアのごみ問題に関して、現地青年などの話し合う機会が多くありました。そのなかで、環境問題という概念そのものが人々の間で馴染みがないことが問題の根底にあると感じました。そして、ごみ問題に関心をもったとき、周囲の行動を変革するよう周りを巻き込んで活動している点がアイシャさんの凄さだと思いました。なぜなら、ごみ問題はひとりで解決できるものではなく、ひとりでも多くの人がごみについて意識を向けるのが大切だからです。また、世界中から色々な人が来て交流をすることは、異なる見方で現地の人が環境について捉えるようになるために、環境への意識変革に効果があると思いました。一方で訪問者であった私も、日本における過剰包装や、自分が捨てたごみはどう処理されているのかなど、ごみ問題に関して改めて考え直す機会を得ました。

　最後になりましたが、このような新しい経験や考え方をもたらしてくれたロンボク島ツアー実施にご尽力くださったすべてのみなさんに感謝いたします。ここでの学びを忘れずに、今後の生活に生かしていきたいと思います。

６．インドネシアのマングローブに対する考察
～マングローブ観光地を訪れて～

金子真実

マングローブとは

　マングローブは海水と淡水が混ざり合う「汽水域（亜熱帯地域の河口など、満潮になると海水が満ちてくるところ）」に生えている植物の総称です。マングローブは多種多様な生き物の生息地となり、海岸沿いの生態系を維持しています。魚や貝、エビなどの天然の海洋資源が守られることから漁業の活性化にも繋がります。

なぜマングローブを守らなければいかないのか

　現在、地球温暖化のために海面は年間約 1.8mm 上昇していますが、マングローブ林は年間約 4mm の泥炭堆積物を蓄えて地盤の高さを維持することができ、海面上昇に耐えつつ海岸の浸食を防ぐことができます。また、潮風や暴風、高波を緩和する自然の壁ともいえる役割を果たしています。

インドネシアにおけるマングローブの現状

　インドネシアには 9 万 5 千 km に及ぶ海岸沿いに約 300 万 ha もの世界で一番広い面積かつ、世界中のマングローブの 2 割を占めるマングローブが存在していますが、パーム（アブラヤシ）農園開拓やエビや魚の養殖、埋め立てなどにより最近約 30 年でそのうちの 4 割が姿を消しているそうです（毎年 5 万 2 千 ha の消失 – 1 週間でサッカ―グラウンド 3 つ分を失い続けることと同等）。国際林業研究センター（CIFOR）主任科学者のダニエル・ムルディヤソ教授は『インドネシアはマングローブの破壊が世界で最も速いスピードで進んでいる国』とこの現状に警鐘を鳴らしています。

マングローブ炭とは

ここで、マングローブ消失の原因の一つであるマングローブ炭に触れてみたいと思います。100 円ショップやホームセンターで売られている「木炭」の大半は実はマングローブ炭で、東南アジア諸国（主にマレーシアやインドネシア）において手っ取り早い現金収入源として乱伐され、環境破壊を助長しています。一方、計画間伐による環境に優しい炭として売り出しているケースもあり、環境意識の高い人が手にしてしまう皮肉なケースもあるようなので、私たち消費者もしっかりと気をつけなければならない問題だと思いました。

マングローブ管理・保護の対策

インドネシアにはマングローブ生態系の管理・維持する戦略を定めた大統領令 2012 年第 702 号というものがあるそうですが、これは管理保護の具体的方策が明記されておらず、実効性に乏しいとされている現状があります。

一例として、ジャカルタ特別州の北岸では地盤沈下への対策として巨大防潮堤（ジャイアント・シーウォール）と 17 の人工島を建設する首都統合沿岸開発（NCICD）が進められているそうですが、前出のダニエル氏の意見では潮の満ち干きの自然なサイクルに影響を及ぼすため、自然のマングローブ林を破壊するだろうということです。

マングローブの保護における観光資源としての活用（PANTAI CEMARE の場合）

私たちが訪れたマングローブ林は PANTAI CEMARE（パンタイ・チュマレ／レンバル）にあり、西ヌサ・トゥンガラ州の州都マタラムから直線距離でおよそ 10km ほど南に位置しています。 2年前から観光地化し、その様子はバリ島のマングローブ観光地などによく似ています。ボートに乗る場合は一艘 50,000 ルピアを払います。私たちが訪れた時はちょうど満潮の時間帯だったため水位が高く、2 艘のうち 1 艘は橋の下をくぐって遊覧できましたがもう片方のボートは屋根が高くて橋の下をくぐれないというハプニングもありました。乗船中は

結婚式に使用する映像用にボートを装飾してロケを行っている団体とすれ違ったり、橋の上で記念写真を撮影するカップルや友人同士なども複数いたりして、流行に敏感な人々などに受け入れられている様子が窺えました。私は山本さんと過去に数回スマトラ島でスタディーツアーに参加した際、仲良くなった現地の人々が現地の橋を好んで誇らしげに紹介してくれたことを思い出していました。

このマングローブ観光地は地方政府がお金を出して整備したということでした。働き手が必要になったため、一部にはマレーシアへ出稼ぎに行っていたが帰ってきたという人もおり、周辺地域の経済活動活性化にも繋がり好ましいことだと思いました。

他方では、川の遊覧ルートの途中に建設しようとしたけれども完成していない橋があったり、ビニール袋をはじめとするゴミがプカプカ浮いていたり、もともとマングローブの根元にはゴミが引っ掛かりやすいという話も聞きました。参加者の一人が水中カメラを使用して画像を撮影しようとしたところ、濁っていて何も見えませんでした。このレポートを書くにあたって情報を調べたところ、ゴミや油などでせっかく植林したマングローブが枯れてしまうこともあるそうです。加えてマングローブには水を浄化する力もあるそうなので、水中カメラで何も見ることができなかったのは心配な状態です。

もちろん、まだ観光地化も始めの段階だと思うのでいっぺんに色々な改善を求めることは酷だと思っています。ちょうど私が乗ったボートの船頭さん(50 代位の男性)の口から『1 人が環境に気を遣っても 10 人がそれに無頓着だ』という言葉を聞くことができました。船頭さんは終始丁寧に説明をしてくれ、この時も非常に真剣な表情でした。私は、レンジャーや地位のある人からではなく、ごく普通の人からこのような説明を受けたことに感銘を受けました。そのまま目的意識や現状把握を高い水準で維持して活動していってくれたらいいなと思いました。

７．私を見つめたインドネシア～2 度目の村ツーリズム～

篠原　優衣

私は 2016 年に初めてインドネシアを訪れました。

インドネシアに行こう、ゆいツールのプログラムに参加しようと決心するまで約 1 年かかりました。正直、私はびびっていました。海外経験が高校の時に行った 2 週間のアメリカでの語学研修だけだったからです。

それなのに、なぜ私がインドネシアに行こうと決心できたかというと、信じていた人に「思っていたのとは違った」と突然別れを告げられたからです。私は途方にくれました。毎日が真っ暗な暗闇の中にいるような日々が続きました。友達には心配かけてはならないと本音も言えず、ただ一人でもんもんとしていました。そのうち、周りの人に対して自分を出すことが怖くなりました。「どうして北海道に来たのだろう…。（大学が北海道にある）」「こんなことするために来たわけじゃない」「どうせみんな、わたしのことなんてわかってくれない」「ここから消え去りたい、逃げたい」と思うようになっていました。

そんなとき、1 年以上前から連絡を取っていたゆいツールのかおりさんのプログラム、インドネシア・ロンボク島のエコツアーが頭をよぎりました。

今しかない。インドネシアに行って 、自分にも何かできるという自信をつけたい。この日々から抜け出すにはインドネシアに行くしかないと思いました。

（2016 年のツアーの様子）

インドネシアには、こうしたい！という気持ちを強く持った人や、自分の思うことをしっかりと口にできる人たちがたくさんいました。

そんな「ぐいぐいくる人たち」に初めのうちは戸惑っていました。そんな中でも笑顔ではいようと心がけました。言葉が通じない分表情で補おうと思いました。

そんなある日、私はお腹を壊し、笑顔でいられなくなりました。その時ふと思ったのは、この暗い表情の私を見たらみんな私の周りからいなくなってしまうのではないか。つまらない奴と言われてしまうのではないか、ということでした。

心配になればなるほどお腹は痛くなる一方で悪循環でした。そんな私に対してインドネシアの人たちは相変わらず「ぐいぐい」きてくれました。「ゆい、いくぞ！」といって力強く私の手を引っ張ってくれました。その強引さに私は救われました。

私は私でいいのかもしれない。これまで見ないようにしてきた自分の嫌いな部分。マイナスな部分。偽ってしまう部分。それがあっても、それがでてしまってもいいんじゃないのかな。それこそが自分なんじゃないかな。と少しずつ考えられるようになりました。

心がすぅっと軽くなりました。

（2016 年度のツアーで）

そこから私は自分を作らずにインドネシアで過ごすことができるようになりました。どんな自分も自分でいいんだと思えるようになってからはありのままの自分でインドネシアの人と関わりたいと思うようになりました。

インドネシアは私にとって特別な場所、私が私をちゃんと見つめられるようになった場所なのです。

そんな私が 2017 年にもう一度インドネシアに行って感じたことは「みんな、目が生きている」でした。いきいきした笑顔には、生きる力があるような気がしました。すごくかっこよく感じました。そして、これまで私は人と関わっていく中で、こんなにも目の前にいる人を知りたいと思うことがなかった自分に気づきました。

何気なく交わす会話。何気なく過ごす時間。もっとこの人を、目の前にいるこの人をもっともっと知りたい。という気持ちで言葉の壁はなくなりました。

インドネシアの人はあったかいです。

インドネシアの人は陽気で明るいです。

そして何より、どんな私でも受け入れてくれるほど、心の優しい人たちです。

私はインドネシアという国で過ごせたからこそ、今の自分があると思っています。この「であい、つながり」をこれから先も繋げたいです。もっともっと色々な人と対話して、いろんな価値観に触れて、生きていきたいと強く思います。

かおりさんをはじめ、このプログラムに関わってくださった全ての方に本当に感謝しています。本当にありがとうございました。

そしてこのレポートを読んでくださっているみなさん。

ひとりひとり異なる感じ方や考え方がある中で、私は感動の瞬間をツアー参加者と、現地の人と共有することが出来ました。それはとてもすごいことなのではないかなと思います。この経験をぜひみなさんにも体験してほしいです。

インドネシアでの日々が私のつらい過去を明るくしました。今私は、つらい過去の話を笑い飛ばせるようになりました。

私の体験記を読み、少しでも興味を持っていただけたら幸いです。きっとみなさんにも驚きの出会いや瞬間があることでしょう。

８．宗教文化の濃いロンボクの村で感じた、愛と幸せ

今井陽一郎（YOTCHI）

初めに。私は今まで宗教とは縁のない生活を送ってきました。

今回のツアー中、住人の９５％をムスリム(イスラム教徒)が占めるロンボク島で、私は今までに味わったことの無い愛を感じ、幸福を確信していました。

私が村で過ごした中で、宗教が生活の細部にまで染み渡り、道徳として息づいていることに驚きを感じ、今自分が暮らしている東京の生活との違いを感じざるを得ませんでした。

日本は美しく、便利な物が揃い、殆どの国民が（自分の知る限り）生活苦を感じる事無く日常を過ごす事ができています。飢餓で苦しむ事もなければ、紛争が起きる事もありません。全ての人に高等教育を受ける権利があり、身分差別も殆どありません。そして、世界有数の先進国です。

私が住む街は、大都会東京の山の手エリア３大副都心の一つで、その駅は世界一利用者の多い駅としてギネスブックに認定される程で、１日に何千人もの人とすれ違うのが日課です。道を行き交う人同士で挨拶する事はもちろん無く、肩や荷物がぶつかり合う事が日常茶飯事、その際に謝る余裕が無い程混雑しています。

都心部は狭いエリアにビルが立ち並び、そのコンクリート群を綺麗に整頓させ、高精度な交通システムを張り巡らせる事で、我々住人が快適に生活する事が可能になっているのです。また、車やバイクなどを購入して乗るよりも電車を利用する方が簡単且つ低コストで済む為、殆どの人がこの交通手段を講じる事から前記の結果の通りとなっているのです。

現代の日本社会は、平和な国として成立させるために充実した法律が作られ、その役割を担っています。法律の規定によって善悪が分別され、そのルールに従って我々国民の行動の実行を重ねてきたからこそ、今の平和な社会を成立させる事ができています。

法治国家を完成させる根本となったのは、人間誰しもが持つ道徳です。その道徳を形作ったものこそ、宗教によるガバナンスが背景にあったのだと思います。ルールが作られる前、かつて人は何を信じていたのでしょうか。希望を持つ時、身の危険を感じた時、誰に頼ったのでしょうか。それは親でも教師でも村長でもなく総理大臣でもなかったはずです。「人としてこうあるべき事」は宗教によって説かれ、昔の人々がそれに習い、構築された物なのではないかと考えられます。

法律を守らなかった場合は法律によって裁かれます。守っていれば何でも許されるのが現

代社会です。つまりは行動を起こす事さえしなければ「人の物を盗みたい」と思っていても構わないのです。それに対し、宗教はそんな心を持ってしまった時点で、「人としてそうあるべきでない」と非難されます。

法と宗教の比較性に類似する具体例があります。

私は飲食店での接客業を始めてから今年で８年が経ちます。来店者が食事を終えて帰られる際、「ありがとうございます」と笑顔を作り元気な声で挨拶するという事は、今まで働いてきた数々の店舗の全てで、同じマニュアルが定められていましたし、それに習い実行してきました。仮に来店者に対して感謝の気持ちが無かったとしてもマニュアル通りの事を行えば、誰からも咎められる事は無いので問題ありません。でも実は、挨拶をしたところで来店者の心には適っているとは限らず、リピーター獲得にも繋がるかどうかもわからないのです。つまり、人間の“行動”をマニュアルで強制するべきではなく、それ以前に来店者に対する“感謝の本心”を持つことが重要なのです。もちろん日本のどこの会社でも、こういったホスピタリティ精神を重要視したマニュアルはありますが、完全では無く、どこか機械的になってしまっているのです。

つまり、“行動の制限をされる”事で法意識を持たせた世界と、“心(感情)を支配される”事で内面的な意識を持たせた宗教文化のある世界では、同じルールが存在したとしても、もたらす結果は異なるという事です。

私達の住む国は几帳面で真面目だったからこそ、技術が大進歩し経済を発展させ、平和で、幸せと感じる事のできる社会となり、沢山の事を学べる今の私を形成してくれました。

しかし、この現代社会は、あまりにもシステム化されすぎて、コミュニケーションツールは発達したのに、対面のコミュニケーション能力は退化し、あまりにも効率化されすぎて人間が身体を動かす機会も少なくなってしまったのです。情報過剰が思考を混乱させ、何か問題が起こるたびに規制も強くなり、またアンバランスな生活はホルモンを低下させ、やがては子孫達にも影響を与える事になるでしょう。

一般的に私たちは自分の中に宗教や確固たる道徳がないために、この世の何が正しくて何が間違いかも判断できず、本心を素直に発言出来ずにマジョリティーに流され、ただ傍観し続ける事しかできず、美しい景色や便利な物だけを選り抜き、嫌な事からは目を背ける事で、気付けば人間が本来感じていた幸福から遠ざかっているのです。

ある意味、私達人間はルールによって管理され過ぎているのかもしれません。物事の正義を見出すための必要条件は、与えられた行動的なルールを頼りにする事だけではなく、自身

の心に決定権があり、その精神を忘れてはならないのです。いずれは、私達を始め子孫達も道徳観念を忘れ去り、“普段、無意識的に感じている幸福と思っているもの”も、かつては宗教によって説かれた「人としてこうあるべき事」本来の幸福ではなく、世俗的でルール通りの幸福になってしまうのかもしれません。

私がロンボク島で過ごした数日間の中で出会ったインドネシアの人たちは、同年代にしては少し幼いはしゃぎ方で、すれ違う人もウェイトレスも子供達も、誰もが暖かい笑顔を振りまいてくれました。そんなカジュアルな空気に最初は戸惑いを隠せませんでした。また、几帳面さや、衛生面への意識などが薄く感じられましたが、今思えば、それは彼等の“人間らしい心”がそうさせていた様な気がします。

私は、ロンボク島で本当の幸福とは何か、を見つけました。

ロンボク島で見つけた愛と幸福の感情は永遠に忘れる事がないだろうと思います。必ず、またあの場所へ戻るつもりです。

９．ツアーに参加した感想

大西飛輝

今回、みんなが大学生か社会人の中、高校 1 年の僕がこの 10 日間のロンボクのツアーに参加した理由は、色んな事に挑戦してみようと思ったからです。

家に 10 日間いても何も得る事もないし、インドネシアに行ったら日本との文化の違いや普段の生活、食事の仕方も日本と違い、手で食べるというのも体験できるしこの 10 日間で人生が変わるかもしれないという気持ちでこのツアーに参加してみました。

今回、インドネシアに行って感じた事がたくさんあります。

１つ目はゴミの埋立地です。まずハエの多さに驚きました。ゴミの埋立地にゴミを持ってきてどう処理するのかと聞いたら、そのゴミはそこに埋めて土をかぶせるの繰り返しと聞いて、これやったら一生ゴミが増え続けて減らないなぁと思いました。

2 つ目は、村の人たちとの交流です。3 日目に村に行く予定で 1 日目と 2 日目はホテルに泊まっていて、ホテルでの生活は日本の生活と似ていたので今日もホテルでいいのになぁと正直思っていました。でも村に行ってみると、みんなフレンドリーでいろんなインドネシア人とコミュニケーションが取れたので村の方が良かったと思いました。僕は日本語しかできないけど、アニメの話になると英語もインドネシア語も話せない僕が少し話の内容がわかりました。

普段の村の生活は、日本語ガイドのアンディやスカディ、あとかおりさんやツアーに参加した人たちが通訳をしてくれたのでとても助かりました。

今でもアンディとスカディや村で知り合った人たちと LINE や Messenger などで連絡をとっています。普段の生活の写真や食事の写真などを送ってくれます。

次に行く時は英語やインドネシア語を覚えてから行きたいです。

日本に帰ってきて思ったことは、日本より便利な国はないんだなということでした。トイレや風呂、食事の面などでも日本の方がとても便利だなと思いました。

インドネシアみたいに不便な中でも楽しめたので、このツアーに参加して良かったなと思いました。

１０．あとがき～2017 年度のツアーを振り返って～

NPO 法人ゆいツール開発工房（ラボ）　山本かおり

2016 年度の学生ツアーに引き続いて、2017 年度も 8 名の若者たちとともに「インドネシア・ロンボク島学生向けエコツアー」を実施することができました。

2016 年度は恐る恐る、という感じでスタートし、インドネシア共和国西ヌサトゥンガラ州中部ロンボク県北バトゥクリアン地区タナ・ベア村のトニーさんという協力者を得て、2017 年度には同じく北バトゥクリアン地区ランタン村で若者たちを巻き込みながら、さらなる発展を遂げることができたと感じています。

ゆいツールがロンボク島で開発するこの“村ツーリズム”は、国際的な新概念「サステイナブル・ツーリズム」を十分に意識したものとなっています。

サステイナブル・ツーリズムとは持続可能な観光という意味で、ツーリズムによって自然が破壊されたり、地域経済の発展が妨げられたりすることなく、むしろ現在と将来にわたり、経済的にも社会的にもその地域がより発展し、同時に環境への影響を小さくしていく取り組みと言ってよいでしょう。外から訪れる旅行者と受け入れ側のコミュニティ双方の参画が求められます。

ゆいツールは、そういったことを踏まえた上で、トニーさんと協力してランタン村の若者たちを育てています。とくに、ごみ問題をテーマにしたワークショップを複数回実施し、インドネシア中で共通のごみ処理の課題について考えさせることもしています。

今回、12 月にランタン村に滞在した若者たちも、村のあちこちに散らかるプラスチックごみを見て考え込んでいました。帰国後に「ごみを拾えばよかった」という声があがったほどです。一方で、村の素朴な暮らしに触れて、自分の中に自然を取り戻した参加者が大勢いました。「何もないのに豊か」に暮らしている村人と、「何もかもあるのになぜか物足りない」私たち。そのことについて思いを巡らし、この村の人以上に実はごみを出している日本での自分の暮らしに気づいたり、便利・清潔であることに慣れすぎ必要以上にエネルギーを消費しつづける都市の暮らしに愕然としたり、特に 20 代の参加者の間で学びは深く生き方に影響を与えるものとなったことに、ツアー主催者として誇りを感じています。

ゆいツールは今後も、ロンボク島で村ツーリズムの開発を続け、日本の若者向けエコツアーを開催していきたいと考えています。

最後に、このプロジェクトを遂行するにあたり、ご協力をいただいた地球環境日本基金及び、国際交流基金の関係者の方々に、深くお礼を申し上げます。

ゆいツール開発工房
YUI TOOL KAIHATSU-LABO

〒155-0032
東京都世田谷区代沢 2-19-12
メールアドレス：yuitool@gmail.com
ホームページ：http://yui-tool.jimdo.com/
ゆいツールブログ：
http://blog.goo.ne.jp/yui-tool
連絡先：０９０－４４２０－６８６７（代表携帯）